

市民社会(NPO)による災害医療支援船の活用

渋谷 健司 (Medical Excellence Japan CEO、Peace Winds Japan 理事)

認定NPO法人ピースウィンズ・ジャパン(PWJ)について

1996年に日本で誕生し、世界39の国と地域で活動してきた国際NGO

紛争地や大規模災害の被災地など困難な現場に真っ先に駆けつけ、支援することを信条に、日本のNGOによる人道・災害支援をリード。累計2,323万人以上の人びとを支援してきました。

peace winds



この世界には
「あきらめない集団」
が必要だ。

世界各地の、危機にさらされた命に
必要な支援を届けるために。

ピースウィンズは、あらゆる課題に
最前線で立ち向かっています。

国内事務所 広島県神石高原町(本部)、東京、佐賀、愛媛

職員数 614人(2024年1月31日時点)

活動地域 海外22ヶ国、日本国内

助成元 ジャパン・プラットフォーム、外務省、国連等

事業規模 72億円(2023年度)

代表理事 兼 統括責任者 大西健丞(おおにしけんすけ)



1967年大阪府生まれ。
1996年に特定非営利活動法人ピース
ウィンズ・ジャパンを設立。
2006年にはダボス・ヤング・グローバ
ル・リーダーに選出。
公益社団法人経済同友会正会員
(2024年より副代表幹事)。

ピースウィンズ・ジャパンの主な事業



OVERSEAS
OPERATIONS

海外 事業

1996年から紛争や貧困、災害などによる人道危機や、生活の危機にさらされた人々の支援を続けており、これまでに世界37の国と地域で活動してきました。

NUMBER OF BENEFICIARIES

延べ受益者数 2022年度 ※世帯や地域、学校単位などは含まず

3,478,844人

NATIONALITIES OF STAFF

スタッフ国籍

24カ国

イラク、ウガンダ、ウクライナ、オーストラリア、ケニア、シエラレオネ、スリランカ、タイ、タジキスタン、ネパール、ハイチ、パキスタン、パラオ、フィリピン、ボスニア・ヘルツェゴビナ、マケドニア、ミャンマー、モザンビーク、モルドバ、韓国、台湾、東ティモール、南スーダン、日本(2022年度)



EMERGENCY
DISASTER RELIEF

災害支援 事業

一秒でも早く、一人でも多くの被災者を助けるために、レスキュー活動から医療・物資・避難所運営支援などを被災地で実施する事業です。

TOTAL FREQUENCY OF DISPATCH

累計出動回数

1996年以降
空飛ぶ捜索医療団
構成団体の活動も含む

63回



NUMBER OF
DISASTER COOPERATION AGREEMENTS

災害連携協定
締結団体数

空飛ぶ捜索医療団
構成団体の協定先も含む

46カ所



PEACE WANKO
JAPAN PROJECT

保護犬 事業

人間の身勝手によって生み出される犬の殺処分をなくし、ペットと人間の共生を実現する目的で運営される、犬の保護・譲渡事業です。

TOTAL NUMBER OF DOGS RESCUED

命を救った犬の数 2023年1月末現在

7,683頭



NUMBER OF DAYS NOT KILLED IN HIROSHIMA

広島県で犬の殺処分機が動いていない日数

2,496日間

ガス室による殺処分



これまでに**39**か国・地域、現在**23**カ国で活動中



紛争・災害などで生命や生活を脅かされた人びとへの緊急人道支援のほか、医療支援、水・衛生支援、農業支援、気候変動への対応など、息の長い活動にも多数の事業地で取り組んでいます。

ピースウィンズ・ジャパンの緊急支援活動の実績

- ✓ 紛争地や大規模災害の被災地など困難な現場に真っ先に駆けつけ、支援することを信条に、日本のNGOによる人道・災害支援を27年間リード。
- ✓ 2008年、米国にピースウィンズ・アメリカ(PWA)を創設。USAIDから日本での大規模災害時の支援パートナーに選ばれる。



PWJ医師による無医村での巡回診療=1996年、イラク北部クルド人自治区



東日本大震災では岩手、宮城、福島3県で支援を展開=2011年4月、宮城県南三陸町

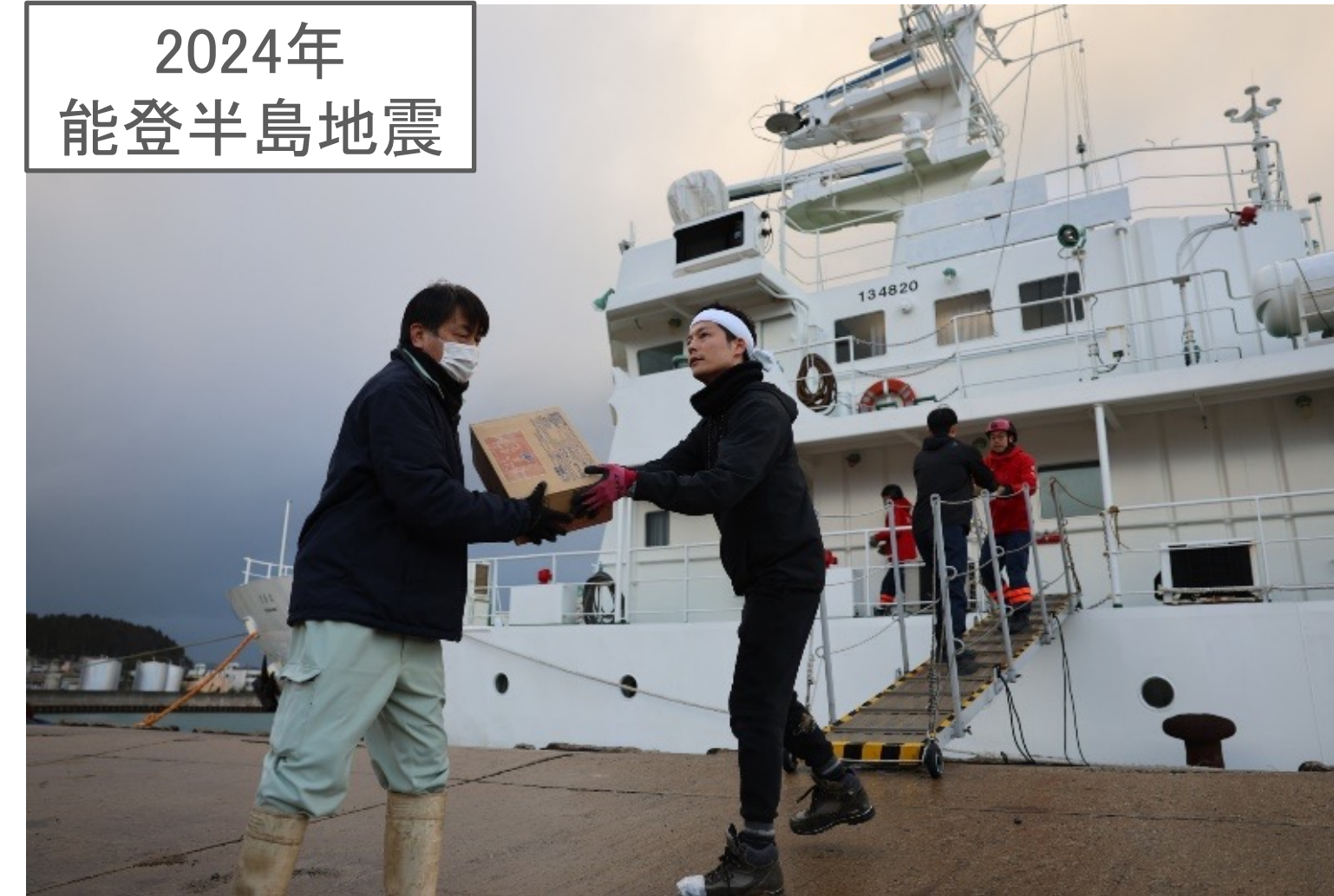


豪雨で水没した病院からの緊急患者搬送=2018年7月、岡山県倉敷市真備町



災害救助犬による搜索活動=2018年8月、インドネシア・ロンボク島

ピースウィンズ・ジャパンの災害緊急支援



- 2011年東日本大震災では、発生翌日にヘリで沿岸部を調査し、気仙沼市を拠点に支援を展開、事業費累計約18.5億円。
- 2014年広島土砂災害でレスキュー犬を含むレスキューチームが初の搜索救助活動を行った。
- 2016年熊本地震では独自のペット同行避難所を運営。
- 2018年西日本豪雨では水没した病院からヘリを使って患者搬送を行った。
- 2024年能登半島地震では、船舶を災害支援に初投入。ヘリによる患者搬送や孤立集落調査も行った。

トルコ・シリア地震を受けた支援(2023年2月～)

発災の一報を受け、2023年2月6日の当日中に医療チームを現地に派遣。海外事業地からも必要な要員を招集し、捜索救助・医療、物資配布の各支援活動を展開。現在も現地駐在員をおき、被害の大きかったハタイ県の村を中心に生活用品支援などを継続している。



ピースウィンズ・ジャパンのヘリ・固定翼機

2024年能登半島地震では、被災地からの患者搬送や孤立集落調査に利用。
珠洲市から金沢大学病院へ7名搬送した。



“コマンダー”：マニラまで無給油飛行可能。2020年4月、利尻島でコロナ想定 of 搬送訓練実施。

空飛ぶ捜索医療団“ARROWS”

ピースウィンズが運営する、大規模災害の被災地にいち早く駆けつけ、救助・救命活動を行うために発足した、医療を軸とした災害緊急支援プロジェクト



特定非営利活動法人
ピースウィンズ・ジャパン



公益社団法人
Civic Force



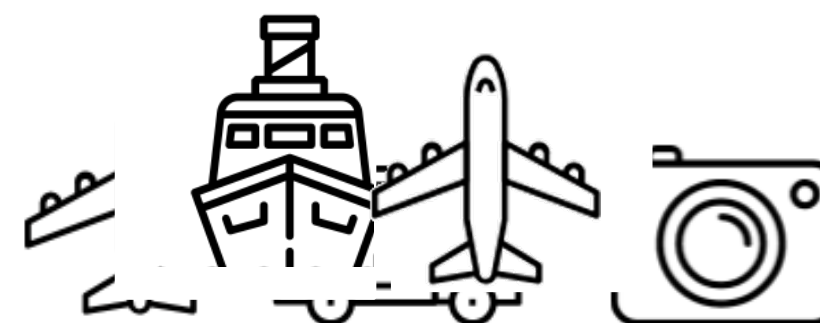
現地調査 & 救助



医療



救助犬



ロジスティクス



メディア



岩佐教育文化財団
SDGs岩佐賞
「特別枠」受賞
(2022年10月)

特別貢献表彰

特定非営利活動法人
ピースウィンズ・ジャパン



レジリエンスジャパン
推進協議会
ジャパン・レジリエンス・
アワード
「特別貢献賞」受賞
(2024年4月)



プロジェクトリーダー・医師 稲葉基高(いなばもとたか)

岡山県真庭市出身、2004年長崎大学医学部卒業。
救急診療、救急外科、災害医療を専門とし、国内外で多数の災害
医療支援を経験。

2018年にピースウィンズに入職。
岡山済生会総合病院救急科勤務(2018年4月より非常勤)。
岡山大学医学部救命救急災害医学講座所属。

PWJ災害支援体制の拡充(最近5年間)

空飛ぶ捜索医療団 (ARROWS) 発足

災害支援体制をより拡充し、2019年始動。大規模災害の被災地にいち早く駆けつけ、救助・救命活動を行うための医療を軸とした緊急支援プロジェクト。

水没した病院からヘリ等で患者を他の病院に緊急搬送。USAIDから日本で唯一のパートナー団体として助成を受ける。



2018



2018年西日本豪雨

医師1名
看護師0名
ロスター登録0名

2019



2019年台風19号

2020



2020年熊本豪雨

クラスター発生施設への医療チーム派遣やワクチン接種協力、マスク150万枚提供など。

2020年~2022年コロナ支援

2023



2023年災害医療支援船導入

医師3名
看護師7名

ロスター登録366名
(医師25名、看護師169名、
救急救命士26名、薬剤師7名他)

災害医療支援船

Power of Change

2023年7月就役。災害支援時の洋上基地として、傷病者や被災者の受け入れ、診療、物資・燃料の補給、支援者の休息等に活用。

山あいで孤立した人たち17名をペットとともにヘリで救助。

能登半島地震陸・海・空からの機動的三次元オペレーション



2023年5月の地震後にも支援に入り、そこで築いた信頼関係が迅速な支援につながった

ヘリコプター
3機を金沢などに配置。
重症患者の搬送、医療スタッフや医薬品の輸送、孤立集落へのアプローチなどに活用

孤立集落調査

珠洲

七尾

金沢

地元企業の倉庫をお借りし、物資の集配拠点として活用

船舶

- ・1/5島根県海士町 からの物資を搬入（珠洲市飯田港）
- ・1/6 珠洲→七尾
- ・1/7七尾→珠洲（物資搬送）
- ・1/9珠洲→七尾
- ・1/10七尾→珠洲（物資搬送）
- ・1/12珠洲→七尾
- ・1/14七尾→珠洲（物資搬送）
- ・1/18珠洲→富山（給油）
- ・1/20活動終了、愛媛へ帰投

＜搜索救助・病院搬送＞

- 1/2: 1名発見→病院搬送
- 1/3: 8名発見(ご遺体)
- 1/4: 2名(重症患者)搬送
- 1/5: 5名(重症患者)搬送
- 1/6: 1名発見→病院搬送(90代女性・地震発生から124時間)

都市型災害に対応する空・海の立体的支援体制の必要性

陸路が寸断されるため、空と海の活用が災害対応の肝になる



首都直下地震・南海トラフ地震では、発災直後から深刻な道路交通麻痺が予測されている。



医療スタッフが病院にたどり着くことが難しく、首都直下地震では傷病者6500人余が未治療死すると推計されている



災害対応医療船とヘリを連動させ、空と海からの支援体制を構築。災害支援の経験豊富なピースウィンズをはじめ民間の医療チームの力を結集し未治療死を防ぐ。

病院船推進法の背景


1. 2021年3月、政府は病院船に関する方針を示し、以下の3つの課題が浮き彫りにされた：
 - 医療従事者の確保
 - 運航要員の確保
 - 平時の効果的な活用方法
2. これに基づき、新たな病院船の建造ではなく、既存船舶を活用した災害医療活動を推進することが提言された。
3. 2021年6月、病院船推進法が制定され、その法文には次のような内容が含まれている：
 - 政府は医療提供を目的とした船舶(含民間船舶)の保有を明文化(基本方針第1条)。
 - 災害時などにおける医療提供体制の整備を進め、地域の医療施設を補完する船舶の活用を促進する(基本方針第2条)。
 - 上記の3つの課題に対して、医療従事者や船員の確保と育成、平時の活用方法に関して、具体的な対応策(「離島などにおける巡回診療、国際緊急援助活動等」)が明示されている(基本方針第4条)。

病院船の概要

1. 脱出船: 1万~1.5万トンの船舶で、被災地に接岸し、主に車両を用いて軽症から中等症の患者を船に運び、被災地から遠くへ移送する役割を担う。医療行為は最小限で、カーフェリーののようなイメージ。
2. 診療船: 被災地に接岸して(あるいは沖に停泊して)、一定期間医療を提供する。
3. 災害医療支援船: ヘリパッドを備えており、接岸が難しい状況でも重症患者や医療スタッフの輸送や診療、物資輸送が可能な船。Staging Care Unit、すなわち、広域搬送拠点臨時医療施設としての機能を持ち合わせる。
4. 政府の見解では、トルコ大地震の例から大型フェリーによる接岸で多数の被災者を移送することが「政府の優先的病院船」のイメージ。

大規模災害時の病院船、25年度中の運用開始目指す方針...当面は民間フェリー活用を想定

2024/07/09 17:40

 この記事をスクラップする



政府は9日、大規模災害時用に医療機器などを備えた「病院船」の整備に向けた船舶活用医療推進本部の初会合を首相官邸で開き、2025年度中の運用開始を目指す方針を示した。岸田首相は、年内をめどに整備推進計画案を策定するよう関係閣僚に指示した。



病院船は災害が発生した際、周辺の海上で救護活動をしたり、患者を被災地から離れた病院に移送したりすることで、陸上の医療機能を補完する役割を持つ。政府は当面、民間フェリーを病院船として活用することを想定し、将来的には国による病院船の保有を目指す方針だ。

脱出船のみで都市型複合災害への対応は可能なのか

1. 発災直後の重症者対応から始まり、災害の各フェーズにおけるシナリオ分析が不足してはいないか。
2. 特に、最悪のシナリオを想定せず、接岸不可能な状況を想定していないのではないか。
3. 内陸地震のトルコ大地震を好事例として分析しているが、海に囲まれた我が国の過去の災害における港湾被害や大型フェリーの接岸可能性などの分析がなされていないのではないか。（実際に、阪神淡路大震災では神戸港は接岸不可能、東日本大震災では津波で接岸不可能。）
4. 推進法の定める病院船の本来の目的と機能と内閣官房準備室の考える病院船イメージに乖離があり、医療提供の度合いが不明瞭ではないか。
5. 医療従事者や平時の活用に関する議論が不足しているのではないか。

災害医療支援船の補完的な活用はできないか？

災害医療支援船としての特長と活用法

1. 国際規格のヘリパッド(軍用大型ヘリを除くほぼすべての機体の運用が可能)を備え、**岸壁の損壊などで着岸が難しい場合でも、船⇄陸地間で被災者や医療スタッフを迅速に輸送可能。繰り返し輸送を行えば、多くの被災者も救出可能(1回5名、2機のヘリで450名程度は輸送可能)。**
2. **発災直後からの負傷者のトリアージと安定化処置**を行い、必要に応じて後方病院に搬送する。
3. 49人分の居室があり、**電気・水・通信設備等のインフラもそろっている**。傷病者以外にも医療的ケア見などの要支援者を受け入れ、環境の整った避難所として過ごしてもらおう。
4. 広い汎用スペースがあり、大量の物資や燃料を保管できる。**災害支援の洋上プラットフォーム**として、ヘリへの給油や離島向け支援物資の備蓄・運搬が可能
5. PWJでは、**医療従事者や船員の確保と育成、平時の活用方法など**においても既に実施が行われていおり、**コストパフォーマンスも良好**

9月17日(日) 広島

中国新聞 デジタル

トップ 新着 地域 スポーツ 地方経済 特集・オピニオン 教育・子ども ライフ・文化 ちゅ

災害医療支援船の運用スタート 広島県神石高原町のPWJ、陸路寸断時に備え

地域 広島 2023/7/31 (最終更新: 2023/7/31)

広島県神石高原町のNPO法人ピースウィンズ・ジャパン(PWJ)は大規模災害で陸路が寸断される事態に備え、災害医療支援船の運用を始めた。災害時は洋上を拠点に負傷した被災者を受け入れて治療に当たり、医療スタッフの派遣や物資の運搬などにも活用する。



朝日新聞デジタル > 記事

災害救援で民間の力生かせ 官民連携や調整担う「支援組織」充実を

有料記事 2023年7月21日 14時00分

記者解説 編集委員・秋山訓子

愛媛県今治市の早川港で今月2日、ちょっと変わった船の披露式があった。国内でも珍しい民間の災害医療支援船「Power of Change(パワーオブチェンジ)」だ。

国内外の被災地で救援活動に取り組むNPO「ピースウィンズ・ジャパン」(本部・広島県)が運航する。長さ68メートル、幅17・4メートルで、最大49人が乗船可能だ。ヘリ



災害医療支援船「Power of Change(パワーオブチェンジ)」=ピースウィンズ・ジャパン提供

都市型災害に対応するための災害医療支援船の導入に向けて



災害医療支援船 Power of Change

2023年7月就役。日本をはじめアジアでの災害支援時の洋上基地として、傷病者や被災者の受け入れ、診療、物資・燃料の補給、支援者の休息等に活用。

- ✓国際規格のヘリパッド
- ✓49人分の居室
- ✓大量の物資や燃料の保管スペース



総トン数 3,453トン

長さ 68.00m

幅 17.40m

最大航続距離 6,000マイル

巡航速力 12ノット



医療船+ヘリによる空と海からの支援体制を構築